The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	名詞の語彙概念拡張に認められる非対称性
Author(s)	岡田, 禎之
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2013, 47, p. 41-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54409
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

名詞の語彙概念拡張に認められる非対称性

岡田　禎之

キーワード：語彙概念拡張／項・付加詞／非対称性／コーパス調査

1. はじめに

ある語が、本来の字義通りの解釈の範囲を超えて、これと関連する別の指示対象を指す場合、その語彙のメトニミー的な意味拡張が生じると考えると、このような意味変化が言葉には豊かに存在するであろうことは想像に難くない。本稿では特に名詞の概念拡張について取り上げて考察していく。名詞の語彙概念拡張のあり方が、当該名詞が項位置に用いられる場合と付加詞位置に用いられる場合とでは、体系的な振る舞いの違いが認められることを観察していきながら、どのような条件の下で概念拡張が認められていくのかを考えていく。その際、コーパスデータを利用して名詞の概念拡張分布の実態を調査することで、それぞれの概念拡張解釈を、その名詞表現の意味解釈の全体像の中でどのように位置づけるべきなのかを考えることで、概念拡張の生産的なメカニズムを示唆していきたい。

ここでは概念拡張をHilpert（2006）のメトニミーの定義を少し修正して、最後に*beyond the range of Ri*と書き加えて以下のように捉えておきたい。

（1）Conceptual expansion of a nominal—an indirect reference in which a nominal refers not to its default referent Ri, but to another referent Rj *beyond the range of Ri*.(cf. Hilpert 2006: 126)

この定義で明らかなように、いわゆるactive zone-profile discrepancyの例は、ここでは概念拡張とは考えない。John filled up the car (gas tank of the car)もJohn washed the car (exterior of the car)もJohn vacume-cleaned the car (interior of the car)も、carによって指し示される物理的事物に対する働きかけである点に変わりはないものと見なし、carという表現が指し示す事物の範囲を超えた指示対象を指し示しているとは考えないこととする。あくまでも、literalな解釈が指し示す事物の範囲を超えた、その表現が指し示す事物とは異なる事物を指し示していると考えられる場合だけを、概念拡張の事例と見なす。

このような概念拡張については、どのようなパターンが生産的であるか、(例えばhuman for non-human, controller for controlledなどが逆のパターンより生産的であるとか（Radden&Kövecses (1999), Handl (2011)など))、どのような理解の仕組みによって成立していると考えられるか（例えばdomain highlighting（Croft (1993), facetization (Paradis 2011)など)、どのようにカテゴリー分類されるべきか（conventional vs. non-conventional (Nunberg (1979), Deignan (2005)), metaphtonymy (Goossens 1990)など）といった問題は良く取り上げられてきていると思われるが、どのような構造条件においてこれが生産的に認可されるのか、といった視点からの研究は筆者が知る限りにおいて、それほど大きく取り上げられてきてはいないと考えられる。

本稿では、この構造的な条件として、項・付加詞の非対称性の問題を取り上げ、これと概念拡張解釈の可能性には強い相関関係がある、ということを検証していきたい。なお紙面の都合上、ここでは調査内容の要約的な部分を示すにとどめ、データの詳細などに関しては、また稿を改めて論じることとしたい。以下2節では、まず概念拡張と、項・付加詞位置との関係について基本的な考察を行い、本稿で行う調査の内容について確認し、3節では、コーパス調査の結果を提示していく。4節は調査内容のまとめ、およびこれまでの考察内容から導き出すことが可能ないくつかの仮説を取り上げてその妥当性を検討し、今後の調査の方向性を考えていく。

2. 項・付加詞と語彙概念拡張の分布

先述の通り、どのような構造条件下において生産的に概念拡張が生じるのか、といった問題はこれまでほとんど扱われてこなかったものであり、Waltereit（1999）やSweep（2009）が例外的な研究であると考えられる。彼らは動詞の目的語位置において最も生産的にメトニミー解釈（概念拡張解釈）が生じる、という考え方で一致しているが、Waltereitはさらに階層を提案しており、他動詞文で目的語位置がある場合にはこの位置で優先的にメトニミーが生じ（2）、これがない場合に主語位置（つまり自動詞の場合に主語位置）でメトニミー解釈が生じ（3）、これ以外の位置ではメトニミー解釈は生じにくいとする優先順をつけている。しかし、このような階層性に関しては反例が多く存在することが認められ、Waltereit自身もそのことを認めている。他動詞の場合、つまり目的語位置が存在する場合にでも、主語のメトニミー拡張は認められるし（4a-c）、斜格要素であっても、場合によっては拡張が認められるのである（4 cf.）。

（2）a. John erased **the blackboard**. (=writings on the blackboard)
　　b. John cleared **the table**. (=things left on the table)
（3）**The kettle** is boiling. (=water in the kettle)
（4）a. **The flute** is having a cold today. (=player of the flute)
　　b. **The White House** isn't saying anything. (=officials in the U.S. government) (Lakoff and Johnson 1980: 38)
　　c. **The Times** didn't ask any question at the press conference.
　　(=reporter from The Times)
cf. He looks like **a commercial for the great outdoors**.
　　(=a character featured in a commercial)

ところで、（4a-c）に挙げたような事例は、（5）にあるように、主語、目

的語などではなく、ただの付加詞要素であると考えられる場合にも、同じような拡張解釈を得ることが可能である。

(5) a. John is absent today from the rehearsal, along with **the flute and the trumpet**.
b. We haven't got any positive reactions other than the one from **the White House**.
c. All reporters were present at the press conference except **The Times**.

このように項位置、付加詞位置という位置の違いに関係なく得ることができる概念拡張がある一方で、項位置において認めやすく、付加詞位置では認めにくくなるタイプの概念拡張も存在している。(6)〜(9) の例を考えてみたい。「ヤカンが沸いている」という場合は「ヤカン」で「ヤカンの中の水」を指すことができる (6a) が、「ヤカンで火を消した」という場合は、「ヤカン」そのものをたたきつけて火を消しているという解釈が優勢であり、「ヤカンの中の水」で火を消したという解釈は取りにくくなると思われる。日本語でも英語でも同じことが言えるようである (6b)。このような場合は「ヤカンの水で」と字句通りの解釈をとれるように明示する (6c) ことが望ましい。次に (7a)「スープを止めて」、というのは「スープを温めている火」を消してくれということであるが、(7b) のように付加詞位置に soup という名詞を置いてやると、たとえスープが火にかけられているということが分かっている場面であっても、soup で「火」を指し示すということは難しく、字句通りに「スープを温めている火」と表現しなければならなくなる。(8a) では、テーブルの上にあるものが撤去されるのに対して、(8b) では、テーブルそのものが撤去されるという解釈しか存在せず、テーブルの上の事物を指す読みはなくなる。(9a) では、「黒板」によって指し示されているのは、「黒板に書かれた文字や記号」であるが、(9b) ではこのような解釈は取られず、「黒板」という物理的事物そのものを指している。もし、(9b) で

blackboardが「黒板に書かれた文字や記号」を指しているのであれば、黒板にはsignature以外にも様々な文字や記号が書かれていなければならないはずであるが、実際にはそのような場面を指しているとは限らず、黒板に唯一書かれているのがそのsignatureであっても良いのである。

(6) a. **The kettle** is boiling. (=water in the kettle)
b. ??I put out the fire with **the kettle**.
c. I put out the fire with **the water in the kettle**.
(7) a. Turn off **the soup**. (=the fire heating the soup)（瀬戸2005:125）
b. ??Don't leave flammables around **the soup**.
c. Don't leave flammables around **the fire heating the soup**.
(8) a. John cleared **the table**. (=things left on the table)
b. John cleared the trash along with **the table**.
(9) a. John erased **the blackboard**. (=writings on the blackboard)
b. John erased the signature off **the blackboard**.

ここで名詞の語彙概念拡張に関して一つの仮説を提示してみたいと考えるが、それは以下のようなものである。

名詞の語彙概念拡張には、
（A）argument位置で成立して、adjunct位置では成立しにくいタイプの語彙概念拡張
（B）どちらの位置においても成立する語彙概念拡張
という2種類の概念拡張パターンが存在する。

（A）は（6）～（9）のタイプであり、（B）は（4）、（5）のタイプであるが、何故項位置と付加詞位置でこのような違いが生じうるのかについて、一つの考え方として、文の中心的な参与者と周辺的な参与者がある場合、どちらが

文脈に適した解釈を与えるための処理労力を掛けるに値する参与者であるのか、という観点から考えることが出来るのではないかと思われる。「ヤカン」で「ヤカンの中の水」を表したいと思っていても、項位置においては可能なのに、付加詞位置では難しくなるのは、前者が文脈に沿って適切な解釈を与えるために解析コストをかけるに充分な、文内参与者として主要な対象であるのに対して、後者はそのような解析コストをかけるのが不釣り合いな周辺的な要素として文に導入されている、ということが関係しているとは考えられないであろうか。「ヤカンの水で火を消した」という状況を伝えたくても、別の状況においては「ヤカン」で「ヤカンの水」を指すことができる場合が確実に存在している（6a）としても、その方略をそのままこの文脈に持ち込むことはやりにくいようである。

このような非対称性が認められる一方で、項性とは全く関係なく、常にどのような生起環境においても認められる概念拡張の事例というのも存在している（4）,（5）。これは、かなり当該解釈の慣習化が進み、その解釈を得ることが容易になっている場合であると考えられる。

さて、このように類別すると話は非常に単純なように見えるのだが、実際には概念拡張解釈を認めるかどうかは、人により、文脈によりかなり左右されるところがあるのも事実である。実際、（6b）の「ヤカンの水で火を消す」という事例については、native speakerの間で結構判断が分かれている。（6b）は何の問題もないのだ、という判断を下す話者も存在しているのである。「ヤカン」と中身の「水」はかなり近しい関係にあり（Handle2011: 191）、前者で後者を指すという解釈は、それほど難しいものではないと考えられる。人によっては、この事例は、むしろ（4）,（5）のグループに属するものだとも考えられるようである。

このように判断が揺れるところがあり、かつ広範囲にわたる現象に関して、少ない用例データを用いて、個人の内省直観判断だけで議論を構築するには限界があると思われることから、筆者はコーパスのデータを量的に検討することで、このような概念拡張の方向性を証拠立てることは出来ないか、

と考えるに至った。より広いコンテクストの中で、これらの様々な名詞句に与えられている解釈がどのような立ち位置にあるものと捉えられるか、を調査してみるべきではないかと考えたのである。

筆者はこれまでの調査の中で（まだ調査途上ではあるが）30個の名詞表現をピックアップし、それぞれBNC（British National Corpus）から500事例をランダムに選択し（500に満たないものはその実数に合わせている）、それがliteralな解釈を与えられているのか、拡張解釈を与えられているのかを、項性との関係において分類してみた。もし先述の（A）（B）のような概念拡張パターンが認められるのであれば、以下のような予測を立てることが可能と考えられる。

予測：もしも（A）（B）のような仮説が成立するのであれば、argument位置において可能な拡張解釈は必ずしもadjunct位置において成立することはないが、adjunct位置において成立する拡張解釈は、argument位置においても認められるはずである。

概念拡張の有り様が、項・付加詞という意味的・統語的配列関係上の特性と関連づけられてコーパス調査が行われたことは、筆者が知る限りにおいて、過去に例がないものであるので、もしこの予測がサポートされる結果になるのであれば、概念拡張の生産的体系の一つを特定することができるのではないかと考えられる。以下では実際の解釈の分布のあり方がどのようになっているのかを見ていくこととするが、その前に分類上の注釈を、主なものに限ってであるが列挙しておきたい。

(i) 項であるか付加詞であるかの判断について。主語、目的語その他の義務的要素は項と考えたいと思うが、斜格表現に関して判断に迷うものについては『研究社新英和大辞典第6版』で述語表現の当該の意味を確認して、用いられている前置詞を指定記述してある場合は当該の斜格表現を項要素であるとカウントすることとする。選択される前置詞表現が特定化されるほ

ど、項的な要素であると考えやすくなると思われるためである（Reinhart &Reuland 1993: 664）。また動詞だけではなく、動詞が名詞化したものもpredicateと考えて、この名詞文において必要とされる要素も項と考えておく。

e.g.,（イ）lean across the table（テーブルの上に身を乗り出す）では、lean on/against は指定されているが、across は辞書に指定されていないので付加詞と分類する。

（ロ）relay message to the brain では、relay A to B の表現が辞書に指定されているので項と考える。

（ハ）bury an emotion in my brain（感情を隠す、忘れ去る）では、関連する意味合いで辞書に［in］の指定がないので、付加詞とする。

（ニ）arrive at her door はargumentだが、arrive with a bottle of wine は付加詞とする。

（ii）分類カテゴリーは5つとした。それは①argument位置にあり、字句通りの意味を持つもの（**Argument Literal（AL）**）、②adjunct位置にあり、字句通りの意味を持つもの（**Adjunct Literal（JL）**）、③argument位置にあり、拡張解釈を持つもの（**Argument Expanded（AE）**）、④adjunct位置にあり、拡張解釈を持つもの（**Adjunct Expanded（JE）**）、⑤その他（**Others（OT）**）である。

（iii）「その他」というグループであるが、これは主にhead of a phraseになっていないもの（複合語のnon-head要素や所有格表現など）が入るグループである。これは、例えば複合語の全体を話者が項位置に置こうと付加詞位置に置こうと、その選択にかかわらず最初から形態論的にmodifier（adjunct）であることが決定している表現だからである。つまり、話者の選択と関連しないadjunct要素であるため、今回の調査からは除外しておく。

また、固有名詞（e.g., Martin Kettle, Talking Heads, etc.）や論文、記事のセクションタイトルなども「その他」に分類しておく。（また詩の表現など、解釈を定めるのが難しいと思われる用例は500事例から省いて、他の用例を加えて分類している。）

（iv）literalにもexpandedにも解釈することが可能と思われる場合、基本的にliteralに分類する。

さて、実際の調査結果についてであるが、ここでは以下の通り4タイプに結果を分類しておく。

①AEの解釈幅がJEの解釈幅より広いもの（16事例）
WHEEL(S), FALKLANDS, BMW, KREMLIN, VOICE(S), SCHOOL(S), PIANO, CITY, DOOR, TABLE, PAPER, VIETNAM, NOSE, PEN, MOUTH, PHONE

②AE、JEともに確認でき、解釈幅に変わりがないもの（9事例）
STUDY(IES), BRAIN(S), WALL STREET, BOTTLE, CROWN, SHAKESPEARE, VIOLIN, STADIUM, HOSPITAL(S)

③AEのみが存在し、JEが確認できなかったもの（3事例）
BLACKBOARD, KETTLE, HEAD(S)

④JEにAEに存在しない解釈が認められたもの（2事例）
EYE(S), HAND

ここで、①から③のグループは、先述の予測に合致する解釈分布になっているが、④は予測に合致しない結果になっている。これについては具体的なデータを検証する必要があるので、3.4節で少し事例を取り上げてみる。以下、それぞれのグループのデータを順次検討していきたいと考える。

3. コーパスデータの検証

3.1. ①グループのデータ検証

①はAEがJEの意味解釈を部分集合として含んでいるタイプである。例えばwheelsという名詞は、字句通りの意味である「車輪、わっか」だけではなく、「物事の進行」を表したり、「乗り物」を表したり、タイヤなどの「きしむ音」を表したりできるが、AEではこの3つの解釈が認められ、JEでは前者の2つの解釈のみが認められた。本稿では紙面の都合上具体的な例文はすべて割愛し、調査結果の表のみを掲載しておく。以下のデータもすべて同じ要領で表示しているが、wheelsの場合、ALが253例、JLは178例、AEは29例、JEは20例、OTは20例存在した、ということになる。このうちで、AEとJEが問題になる部分であるため、それぞれ内訳を示しておく。前者は、「物事の進行」の用例が18例、「乗り物」の用例が9例、「タイヤのきしむ音」が2例であり、後者は「乗り物」が17例、「物事の進行」が3例発見できた、ということである。

①WHEELS (AL: 253 (50.6%), JL: 178 (35.6%), OT:20 (4.0%))

AE	29 (Procedure: 18, Vehicle: 9, Sound: 2)	5.8%
JE	20 (Vehicle: 17, Procedure: 3)	4.0%

次にFalklandsはフォークランド諸島という地理的な場所を指すだけではなく、「フォークランド紛争」や「フォークランド諸島の経済」「フォークランドの人々」といった解釈にも用いられているが、AEではこの3つの意味が認められ、JEでは2つの意味が確認できた。この①タイプに属する名詞は30個のうちの16個であり、およそ半分がこのタイプであったということになる。以下の事例については、説明を加える部分以外については、分布表のみを提示しておく。

①FALKLANDS (453 instances) (AL: 51 (11.3%), JL: 116 (25.6%), OT: 234 (51.6%))

AE	25 (War/Crisis: 22, Economy: 1, People: 1)	5.5%
JE	27 (War/Crisis: 26, People: 1)	6.0%

①BMW (AL: 32 (6.4%), JL: 28 (5.6%), OT: 186 (37.2%))

AE	177 (Car: 152, Representative/Workers: 21: Driver:4)	35.4%
JE	77 (Car (Motorcycle): 76 (2)), Driver: 1)	15.4%

①KREMLIN (240 instances) (AL: 13 (5.4%), JL: 57 (23.8%), OT: 71 (29.5%))

AE	53 (Government 45, Spokesman/Statesman: 8)	22.1%
JE	46 (Government 46)	19.2%

この①グループで最も解釈のバリエーションが大きかったのは、Voice(s)である。ここでも「声」で、その声を発する「人間そのもの」を指したり、声を発する人の「考え方や意見」を指したり、「方言、なまり」を指したり「意見表明者、代表」を表したり、「歌手」を指したりする用例が見つかっている。これらは項位置において見つけられた用例であるが、このうち付加詞位置では「人間」「考え方や意見」「歌手」の用例が特定できている。

① VOICE(S) (AL: 233 (46.6%), JL: 177 (35.4%), OT: 14 (2.8%))

AE	71 (Person/People: 36, View/Opinion: 29, Accent:2, Representative:2, Singers:1)	14.2%
JE	5 (Person/People:3, View/Opinion:1, Singer:1)	1.0%

①PIANO (AL: 95 (19.0%), JL: 131 (26.2%), OT: 253 (50.6%))

AE	19 (Performance: 12, Sound: 6, Lesson: 1)	3.8%
JE	2 (Sound: 1, Performance: 1)	0.4%

①PAPER (AL: 86 (17.2%), JL: 91 (18.2%), OT: 100 (20.0%))

AE	118 (Documents/Newspaper: 114, Newspaper company: 2, News reporter: 2)	23.6%
JE	105 (Documents/Newspaper: 102, Newspaper company: 3)	21.0%

①VIETNAM (AL: 75 (15.0%), JL: 226 (45.2%), OT: 135 (27.0%))

AE	35 (War: 25, Government: 8, Army: 1, People: 1)	7.0%
JE	29 (War: 28, Army: 1)	5.8%

①SCHOOL (S) (AL: 142 (28.4%), JL: 208 (41.6%), OT: 101 (20.2%))

AE	39 (Staff: 36, Students: 1, Classes: 1, School days: 1)	7.8%
JE	10 (Staff: 9, School days: 1)	2.0%

①CITY (AL: 67 (13.4%), JL: 171 (34.2%), OT: 221 (44.2%))

AE	19 (Government: 7, Financial district: 7, People: 5)	3.8%
JE	22 (Financial district: 18, Government: 4)	4.4%

①DOOR (AL: 247 (49.4%), JL: 172 (34.4%), OT: 40 (8.0%))

AE	7 (Building: 5, Person on the other side: 2)	1.4%
JE	34 (building: 34)	6.8%

①TABLE (furniture) (AL: 211 (42.2%), JL: 229 (45.8%), OT: 51 (10.2%))

AE	4 (People at the table: 3, Things on the table: 1)	0.8%
JE	5 (People at the table: 5)	1.0%

①NOSE (AL: 255(51.0%), JL: 198 (39.6%), OT: 38 (7.6%))

AE	8 (Instinct: 4, Smell: 3, Interest: 1)	1.6%
JE	1 (Instinct)	0.2%

①PEN (AL: 244 (48.8%), JL: 129 (25.8%), OT: 80 (16.0%))

AE	23 (Writing: 22, Writer: 1)	4.6%
JE	24 (Writing: 24)	4.8%

①MOUTH (AL: 199 (39.8%), JL: 267 (53.4%),OT: 25 (5.0%))

AE	5 (Words/Expressions:4, Person:1)	1.0%
JE	4 (Words/Expressions: 4)	0.8%

①PHONE (AL: 147 (29.4%), JL: 51 (10.2%), OT: 198 (39.6%))

AE	34 (Line:20, Person:12, Call:2)	6.8%
JE	70 (Line: 65, Call: 5)	14.0%

3.2. ②グループのデータ検証

次のグループは②AEとJEの解釈のバリエーションが等しかったタイプである。このタイプには9事例が属した。例えばstudyであるが、「勉強、研究」ではなく、それを行う場所としての「書斎や研究室」という意味もあるし、「研究をする人」を指す場合もある。一方でこの2番目の解釈で付加詞位置にある用例はきわめて少ないが、全く存在しないわけではない。

②STUDY (IES) (AL: 173 (34.6%), JL: 234 (46.8%), OT: 37 (7.4%))

AE	43 (Researcher(s): 34, Study room: 9)	8.6%
JE	13 (Study room: 12, Researcher(s): 1)	2.6%

この②グループでもう一事例確認しておく。Brain(s) という表現は、臓器としての「脳」以外に、脳が蓄えている「知識」、脳によって顕在化する「意識、感覚」、脳に象徴される「知的な人間」などの意味を表すが、これらの意味は項・付加詞の位置関係とは関係なく、等しく認められている。

②BRAIN (S) (AL: 135 (27.0%), JL: 151 (30.2%), OT: 123 (24.6%))

AE	52 (Intellect: 33, Consciousness/sense: 15, Person(s): 4)	10.4%
JE	39 (Consciousness/sense: 15, Intellect: 14, Person(s): 10)	7.8%

②WALL STREET (498 instances) (AL: 1 (0.2%), JL: 17 (3.4%), OT: 284 (56.8%))

AE	95 (Stock market: 76, People in the financial circles: 19)	19.0%
JE	101 (Stock market: 98, People in the financial circle: 3)	20.2%

②BOTTLE (AL: 236 (47.2%), JL: 191 (38.2%), OT: 55 (11.0%))

AE	13 (Content: 13)	2.6%
JE	5 (Content: 5)	1.0%

②CROWN (AL: 74 (14.8%), JL: 44 (8.8%), OT: 188 (37.6%))

AE	95 (Person(King/Queen): 95)	19.0%
JE	99(Person(King/Queen): 99)	19.8%

②SHAKESPEARE (AL: 134 (26.8%), JL: 54 (10.8%), OT: 210 (42.0%))

AE	43 (Works: 43)	8.6%
JE	59 (Works: 59)	11.8%

②VIOLIN (AL: 135 (27.0%), JL: 153 (30.6%), OT: 198 (39.6%))

AE	11 (Player: 11)	2.2%
JE	3 (Player: 3)	0.6%

②STADIUM (AL: 129 (25.8%), JL: 299 (59.8%), OT: 66 (13.2%))

AE	3 (People: 3)	0.6%
JE	3 (People: 3)	0.6%

②HOSPITAL(S) (AL: 172 (34.4%),JL: 197 (39.4%), OT: 99 (19.8%))

AE	30 (Staff: 30)	6.0%
JE	2 (Staff: 2)	0.4%

3.3. ③グループのデータ検証

3つめのグループは数が少なく3事例がこれに属した。③ＡＥの解釈はあってもJEの解釈が見つけられなかったタイプであるが、blackboardやkettleがこのグループに属する。

③BLACKBOARD (267 instances) (AL: 73 (27.3%), JL: 141 (52.8%), OT: 44 (16.5%))

AE	9 (Writings on the blackboard: 9)	3.4%

③KETTLE (AL: 243: (48.6%), JL: 98 (19.6%), OT: 89 (17.8%))

AE	70 (Water contained: 70)	14.0%

③HEAD(S) (AL: 273 (54.6%), JL: 218 (43.6%), OT: 5 (1.0%))

AE	4 (People: 2, Intelligence: 2)	0.8%

3.4. ④グループのデータ検証

ここまでの事例はすべて、本稿の予測に合致するものであった。すなわち、付加詞位置における拡張解釈はすべて項位置において認められ、一方で項位置に認められる解釈は必ずしも付加詞位置において認定できるとは限らない、という非対称性をサポートしていた。最後に反例として残るものがあるが、それが4つめのグループであり、④JEにAEでは見つからなかった解釈が認められるもの、である。

このグループに属する名詞はこれまでのところ2つある。その一つは

eye (s) であるが、身体部位の表現はざまざまな解釈に用いられ、この名詞もセットフレーズに多用されて、様々な概念を表すように解釈が広がっている。500事例の中から得られた結果として、少なくとも5つのタイプの意味拡張を認定することができると考えられる。目を用いて行う「注目、着目」、目で見ることから得られる「見解、意見」、目が向けられる方向を表す「視線」、目にその機能が集約される「観察者、見張り」、目で捉える対象である「目標、目的」が、拡張解釈として確認できたが、このうち「目標・目的」を表す用例は、付加詞位置には認められても項位置には500例の実例のうちからは発見できなかった。

ただ、目的を表す意味ではhave an eye to（on）～というセットフレーズで用いられることが、OEDにも記載されており、BNCでも検索範囲を広げるとこのような用例を見つけることは可能である。付加詞位置ではwith an eye to（on）～というセットフレーズで、この目的の意味は良く用いられ、項位置でのセットフレーズhave an eye to（on）～よりも高頻度で用いられているので、500事例の中には後者の項位置における表現は認められなかったが、このような事例は少し範囲を広げることで簡単に見つけることが可能となる。（確かにこれまでの事例についても、範囲を広げることによって、付加詞で認められなかった解釈が認められるという可能性はあるが、ここで問題となる意義は辞書に記載される形で認められている、ということにも意味があるのではないかと考えられる。）また、関連するOEDの記載を見てみると、この意味では14世紀頃には既に用いられているが（10）、have an eye to にあたる表現が続き、17世紀になってようやく副詞句表現のwith an eye toが登場してきている。現在ではadjunct phraseとしての使用頻度の方が高く、項位置での用法は劣勢になってしまっているが、このような使用頻度の変化は他の事例にも認められうることであろうと思われる。

④EYE(S) (AL: 200 (40.0%), JL: 142 (28.4%), OT: 29 (5.8%))

AE	83 (Attention: 61, Perspective/View: 11, Line of sight: 8, Observer: 3)	16.6%
JE	46 (Perspective/View: 32, Attention: 6, Observer: 4, **Aim: 3**, Line of sight: 1)	9.2%

（10）OED の eye (6b) to have an eye to~, with an eye to~

a. 1375 The Kyng ...Till thame, and nouthir ellis-quhar had ey.
(The king to them, and not else-where had eye.)

b. 1375 I pray ȝhow That nane of ȝow for gredynes Haf E till tak of thair Richess.
(I pray you that none of you for greediness have eye to take off their wealth.)

c. 1526 Some feareth synne & payne bothe, hauynge an eye and respecte to bothe in maner indifferently.
(Some fear sin & pain both, having an eye and respect to both in manner indifferently)

d. 1535 They called vpon the Lorde, yt he wolde haue an eye vnto his people. (They called upon the Lord, (so) that he would have an eye onto his people.)

e. 1593 Haue an eie to the maine-chaunce.
(Have an eye to the main chance.)

f. 1607 Men will Councell with an eye to them~selves.
(Men will counsel with an eye to themselves.)

さてもう一つの例外的事例として、残っているのがhandである。handで「支配力」を表したり、「人間（人手）」を表したり、「手についた技術」「援助」「手書きの筆跡」を表したりするという事例が項位置で認められるが、付加詞位置に非常に生産的に認められる用法として、「一方の側（side）」を

表す用例が多用されている。これはon the one hand, on the other handというセットフレーズで登場してくるものであるが、このsideの意味で用いられるhandは現在ではこのセットフレーズに特化して集中的に認められるようである。この反例に関して述べておきたいことは、このhandという名詞の解釈のあり方を見ても、(i) ヴァリエーションという点で考えれば、依然としてここでも項位置における解釈幅の方が広く豊かである、という点においては他の事例と変わりはないと思われることと、(ii) OEDの記述を見ると、過去には項位置におけるhandにsideの意味が認められたということ（OEDの初出事例（11a）など）、(iii) on the one hand, on the other handというセットフレーズは17世紀に登場する後発表現であること、(iv) 更に現在でもright hand side/left hand sideという表現は項、付加詞という位置の区別と関係なく多用されており（BNC全体で300事例ほど存在）、handとsideの意味解釈が親和性の強いものであると認められること、である。現在では、on the one hand / on the other handというセットフレーズに特化した用法になってしまってはいるものの、本来的にはhandでsideの意味を示すということは可能なものであると考えることもできるのではないだろうか。

④HAND (AL: 154 (30.8%), JL: 140 (28.0%), OT: 50 (10.0%))

AE	27 (Control: 20, Person: 4, Skill: 1, Help: 1, Handwriting: 1)	5.4%
JE	129 (**Side: 121**, Person: 3, Handwriting: 3, Control: 2)	25.8%

(11) OEDのhand (B.4) side/directionの意味

a. c1000 Sette Ephraim on his swiþran hand þæt wæs on Israheles wynstran hand.
((He) set Ephraim on his right side that was on Israhele's left side.)

b. c1205 Heo iseȝen an heore riht hond, a swiþe fæier æit-lond.
(They saw on their right side, a very fair island.)

c. c1320 Chese on aiþer hand Wheþer þe leuer war Sink or stille stand.

(Choose on either side whether it would be better for you to sink or stand still.)

d. 1513 At the last he came out ... with a Bishop on every hand of him.

e. 1598 ... Augustus was on the mending hand. (in the way to recover)

もちろん他の事例に関しても歴史的に意味解釈が廃れていったり、変化しているものがあるはずであり、その点までも含めて検証することが必要であるが、現時点でのデータ処理としてはここまでとしておきたいと考える。繰り返しになるが、eye(s)、handで付加詞位置にだけ認められた2つの意味解釈は、いずれもOEDに明記された、これらの語彙項目の意味として確立しているものであることと、項位置における用例が古くから存在し、現在ではその用法が廃れ、むしろ付加詞位置において優位に用いられる意味として定着しているものであるということを述べておきたい。

4. コーパスデータ検証からのまとめ

ここまでの調査から得た結論としては、基本的に概念拡張解釈には非対称性が認められ、項位置における拡張解釈が優勢であることが判明したと思われる。逆に付加詞位置における解釈のバリエーションの方が大きくなる名詞はeye(s)のみであった（500事例中には項と付加詞に共通して認められた4種の拡張解釈以外に「目標・目的」の解釈事例があり、これは付加詞位置にしか認められなかったため）。また付加詞位置において、項位置にない解釈が認められたのはeye(s)とhandのみであった（しかもeye(s)については検索範囲を広げることでこの反例は解消し、handについてはset phraseとしての用例が認められるのみである）。

このような調査結果から、以下のようなことが示唆され、今後の更なる調査の方向性が導かれるものと考える。

(i) 項から付加詞に意味拡張が浸透していくという方向性が支持されてい

るのであって、少なくとも逆の方向性で意味が拡張していくパターンが生産的なわけではないだろうということ。もちろん、ここで扱ったのはそれぞれの名詞に関して500事例ずつ、というごく小規模な分布調査でしかなく、これによって30の名詞の意味分布の全容が決定されるなどということは全くない。しかし、いくつかの異なる名詞に関しての調査を繰り返していくことから見えてくる全体の傾向というものには、それほど大きな誤差はないのではないかと考えられる。この点については更に多くの名詞についての調査を重ねていくことで、確信度を高めていくことができるのではないかと考える。

（ii）この拡張パターンの方向性から考えられる一つの可能性として、まず項位置において特定の解釈が固定され、これが定着することによって、この文脈から独立した付加詞位置でも利用できるようになっていくというストーリーが有望であると考えられる。ただし、これは歴史的な資料によるサポートが必要であり、今後の検証が必要となる。（今後、歴史的なコーパスデータの検証を少しずつ時代を遡りながら行っていく予定である。）

（iii）このような概念拡張は、英語という特定言語にしか認められないということは不自然であると思われるため、他の言語の場合にも同じような概念拡張のパターンが認められるのかどうかの検証が必要である。そうすることで、一般的、普遍的な概念拡張のパターンを確立していくことができるのではないか、と思われる。（この件に関しては、まず現代日本語のデータ調査を少しづつ始めているところである。）

本稿では、名詞の語彙概念拡張を、当該名詞が項として文内に導入されているのか、付加詞として導入されているのか、という区別立てと関連づけて調査することで、その解釈分布の非対称性を導きだした。このことにより、生産的な概念拡張の方向性、概念拡張の仕組みについて考える契機が与えられたことになると思われる。

［主要参考文献］

Croft, William (1993) “The Role of Domains in the Interpretations of Metaphor and Metonymy.” *Cognitive Linguistics* 4/4: 335-370.

Deignan, Alice (2005) *Metaphor and Corpus Linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.

Goossens, Louis (1990) “Metaphtonymy.” *Cognitive Linguistics*1/3: 323-342.

Handl, Sandra (2011) *The Conventionality of Figurative Language*. Tubingen: NarrVerlag.

Hilpert, Martin (2006) “Keeping an Eye on the Data: Metonymies and their Patterns.” In Stefanowitsch, Anatol & Stefan Gries, *Corpus-based Approaches to Metaphor and Metonymy.* 123-151. Berlin: Mouton de Gruyter.

Lakoff& Johnson (1980) *Metaphors We Live by.* Chicago: The University of Chicago Press.

Langacker, R. (1993) “Reference-point Constructions.” *Cognitive Linguistics* 4/1:1:-38.

Nunberg, Geoffrey (1979) “The Non-Uniqueness of Semantic Solutions: Polysemy.” *Linguistics and Philosophy* 3/2: 143-184.

Paradis, Carita (2011) “Metonymization.” In Benczes, Reka et al. (eds.) *Defining Metonymy in Cognitive Linguistics,* 61-87, Amsterdam: John Benjamins.

Radden, Günter & Zoltan Kövecses (1999) “Toward a Theory of Metonymy.” In Panther, Klaus-Uwe and GünterRadden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*, 17-59, Amsterdam: John Benjamins.

Reinhart, Tanya & Eric Reuland (1993) “Reflexivity.” *Linguistic Inquiry* 24: 657-720.

瀬戸賢一（2005）『よくわかる比喩』東京：研究社.

Sweep, Josefien (2009) “Metonymy without a Referential Shift.” In Botma, Bert & Jacqueline van Kampen (eds.) *Linguistics in the Netherlands 2009*. 103-114. Amsterdam: John Benjamins.

Waltereit, Richard (1999) “Grammatical Constraints on Metonymy.” In Panther, Klaus-Uwe and Günter Radden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*.233-253. Amsterdam: John Benjamins.

（文学研究科教授）

SUMMARY

The Asymmetric Distribution of Nominal Conceptual Expansions

Sadayuki Okada

When a nominal expression designates a referent that is beyond the range of its default referent, the nominal is considered to have a conceptual expansion. We investigate the licensing condition of the conceptual expansion of nominals, paying special attention to argumenthood. It is demonstrated that argument nominals show a wide variety of extended references, while the same expressions located in adjuncts only cover part of the designations attested in argument positions. Using a preliminary survey on the distribution of extended nominal reference with data from the British National Corpus, we delve into a probable mechanism of lexical semantic change.